

# 博報財団 第12回「国際日本研究フェローシップ」成果報告書

## I. 研究成果概要

氏名	梁 青 (リョウ セイ)
在住国名	中国
所属・役職	厦門大学・副教授
招聘回(招聘研究期間)	第12回 (2017年9月1日～2018年8月31日)
受入機関	東京外国語大学・国際日本研究センター
招聘研究テーマ	古今集前夜における日本漢詩の和様化—島田忠臣と菅原道真を中心に—
研究目的	奈良時代の『懐風藻』と勅撰三集を代表とする漢風賛美時代の日本漢詩は、中国詩の題材や表現を殆どそのまま踏襲したもので、中国詩に先例がない用例は稀である。九世紀後半以後、日本漢詩はいよいよ爛熟期を迎えるようになる。島田忠臣・菅原道真をはじめとする漢詩人たちは、急速に中国詩的表現技法を吸収すると同時に、自国の土着的・伝統的な文化に着目して、それを強調することにより、新しい表現世界を切り開いていくのである。本研究では、島田忠臣と菅原道真の漢詩に如何なる日本の表現・発想が存在しているのかを考察することによって、『古今集』成立前夜における和漢交流の様相を明らかにしたい。また忠臣と道真の切り拓いた漢詩表現がいかに平安中後期の漢詩文に受け継がれていくのかについて考察したい。

### 研究成果概要:

本研究で得られた成果は次のように挙げられる。

#### (1) 忠臣詩・道真詩の和様化とその生成背景に関する説明:

九世紀前半までの桜花詩の表現や発想はほとんど六朝・初唐詩に倣ったもので、日本の桜の特性を表現し得ていない。それに対して、島田忠臣と菅原道真は桜という伝統的な歌材を漢詩の上に表現しながら、中国詩の「梅・桃・李・蘭」に対する「桜」の優位性を唱える。こうした試みを行った背景には、桜を日本のものとして再認識し、日本漢詩を中国詩に拮抗する地位に立たせようという九世紀末の詩人たちの国風意識があるのである。九世紀末の桜花詩に「早く散る桜を惜しむ」「桜を散らさないように春風に贈り物をしたい」「鶯が桜を巣とする」など和歌的表現が多く用いられるという事実は、漢詩文の勢力に拗りつつ、和歌が次第に公的地位を獲得していくという文学史的動向を物語っている。

#### (2) 忠臣詩・道真詩と後世の日本漢詩との影響関係に関する説明:

「衣錦還郷(錦を衣て郷に還る)」は立身出世した者が意気揚々と生まれ育ったところに帰る意である。「衣錦還郷」は日本漢詩文に登場するのは九世紀末からである。島田忠臣と菅原道真は花・紅葉の錦を衣として着て故郷に帰ることを詠んでいる。本来「花・紅葉一錦」の比喻表現と「衣錦還郷」とはお互いに関係することなく独立して使われているが、忠臣詩と道真詩では、「錦」を介して二つの表現が結ばれることになる。それまでの日本漢詩の表現をさらに新しい方向へと前進させたという点で、忠臣詩と道真詩が大きな役割を果たしたことが判明した。十世紀以後、「衣錦還郷」は花・紅葉を詠むために用いられる表現として定着するようになる。この考察によって、忠臣と道真の切り拓いた日本の表現は後世の日本漢詩文に継承されていくことが明らかになった。

展望：

今回は平安漢詩文に詠まれた「衣錦還郷」について考察したが、今後は仮名文学において「衣錦還郷」がどのように詠まれているのか、「衣錦還郷」がどのように仮名文学に流れ込んでいくのかについて、さらなる追究を行いたい。

また、中日の歴史社会的諸条件は、両国の漢文学の性格を根本的に規定しているのである。ゆえに、平安朝漢詩文と中国文学との違いを検討するにあたっては、単に表現上の違いにとどまらず、そのような表現を育みえたところの歴史社会的基盤にまで考察を掘り下げていかなければならないと考えている。今回が最初の試みを行ったものである。「衣錦還郷」の和様化に踏み込むことによって、日中間の文化風土の違いを垣間見ることができた。今後も平安漢詩文の変容をもたらした原因について引き続き研究していきたい。